

三遠南信地域住民セッション 要旨

■開会あいさつ

NPO 法人地域づくりサポートネット

山内秀彦



今年度の「第28回三遠南信サミット2021 in 遠州」は初めてオンラインで開催することになり、住民セッションは事前収録し録画配信されることになりました。今回の住民セッションはコロナ禍で住民団体の活動が難しくなっている中で、どんな影響を受けているかを意見交換する場として、サミットテーマに沿って「ウィズコロナ時代における市民活動の見直しと新たな取り組み」という住民セッションテーマを設け、3つの話題で意見交換会を行うことにしました。現在このような社会状況の中でオンラインでも交流ができ、多くの方々と情報交換ができる機会にもなると捉えて取り組んでいければと考えます。

■開催趣旨説明

愛知大学総合郷土研究所 平川雄一



2020年に世界的に流行した新型コロナウイルス感染症の拡大・蔓延の影響を受けまして、市民団体が主催するイベントや行事などが全国的に中止あるいは延期が相次ぎ、市民活動にも大きな影響が出てしまいました。三遠南信地域の市民団体でも活動自粛を余儀なくされたところが多かったと思います。そこで今回の住民セッションではこうした影響下での市民活動の現状を情報共有したいと考えまして、市民団体の活動状況と今後の取り組みについて「ウィズコロナ時代における市民活動の見直しと新たな取り組み」のテーマで意見交換しようということになりました。

意見交換は3つの話題を決めまして、各話題に対して1~2名、計4名に提供者として発

表していただきます。各話題おおよそ30分ずつで進めます。各話題は、最初に10分程度でプレゼンテーションし、その後参加者のみなさんから自由に意見を述べていただきたいと思います。参加者のみなさんと活発な意見交換ができればと思います。

■意見交換会

話題① コロナ禍の市民活動状況

浜松市市民協働センター 今中秀裕



浜松市市民協働センターは、市民と行政の中間的な立場で市民活動に関する情報の提供や活動支援を行っています。平成22年に開設し、今年で11年目になります。建物は3階建て、1・2階が市民協働センターで、オープンスペースは市民活動団体が役員会などに無料で使えるように開放しています。管理運営は指定管理者として、「浜松市市民協働サポートグループ」を(株)東海まちづくり研究所(共同事業体代表)、認定NPO法人魅惑的倶楽部(エキゾチッククラブ)、東海ビル管理(株)の3団体が組織して運営しています。

それでは協働センターの役割について説明します。機能としては5つで「NPO法人等の組織強化(相談機能充実)」「市民活動の担い手の育成」「交流と活動のマッチングの支援」「連携強化(他団体や大学、企業等)」「新規利用者の掘り起こし・認知度向上」です。

「NPO法人等の組織強化」では、新型コロナウイルス感染症の影響で人が集まったり対面で話をしたりすることが難しくなり、NPO法人で毎年開催が必要な総会や理事会ができませんでした。そこで、YouTubeを使ってみなし総会(書面表決)のやり方を紹介しました。また、会議や打ち合わせでよく使うよう

になったZoomについて、初心者のためのZoom講座を三密にならない形で開きました。

「市民活動の担い手育成」では、中高生のボランティアクエスト、50歳代からのボラ活のすすめなどを開催。コロナの影響でお店の営業時間が制限されたり、お客様が減少したりする中で、まちなかの事業者等を応援して活性化させていくために「ゆるはま」というビデオクリップを作ってYouTubeで流しています。

「交流と活動マッチング」では、これまでNPO法人や市民活動団体、行政、民間企業の方などに会場に集まっていただき、それぞれの活動を紹介し協働してできる事業をマッチングさせていくパートナーシップミーティングを開催していました。今年度は対面をやめて市民協働センター1階をスタジオ化して、ここでZoomやYouTubeで配信しました。

「連携強化」では、特に今年は東日本大震災から10年になりますが、こうしたことを忘れずに次世代に継承するために大学生たちが、3.11復光キャンドルナイトを毎年やってきました。昨年はコロナウイルス感染拡大防止のために中止になりましたが、今年は事前に写真展とシンポジウムを大学生たちのグループと協力して行なっています。企業との連携では、CSR相談、NPO団体の協働相手の紹介相談なども実施しています。

「新規利用者の掘り起こし」としては、大学生ボランティアの活動拠点づくりを支援しています。センター2階に市内の各大学から集まった学生ボランティアが「FRESHひろば」を開設してボランティア活動を行っています。こうした活動の支援をしています。それから昨年からは始めたアイリーンブループロジェクトがあります。第1回東西震災シンポジウムを開催して、その時に石巻市在住の方の話から奇跡の花「あいりちゃん」(フランス菊)を育てることで命の大切さを学ぶプロジェク

トを実施し、新しい試み、新しい利用者の掘り起こしを進めています。

浜松市内のNPO法人ですが、浜松市内に事務所のあるNPO法人数は、現在総数234法人で、昨年1年間で解散したのが8法人、新しくできたのは3法人です。今年はコロナの影響で人が集まって設立総会開催などが難しかったせいか、例年より設立法人数は少なかったです。

6月に緊急事態宣言が解除されてから市内の250の市民活動団体にアンケート調査をお願いして74件回答がありました。市民活動の中で困っていることや不安なことでは、総会や理事会の開催で、総会を书面表決で実施した団体は15団体。会議や打ち合わせは集まる会議を中止してメールでのやり取りが中心でした。

イベントを中止・延期したのは74団体のうち30団体以上。事業休止や活動制限によって活動収益に影響が出ているところもいくつかありました。6月でも活動再開の見通しが立てられない状況にあることが多くの団体の困っていることでした。

市民協働センターや行政に求めるサポートでは、安心安全に使える場所がほしいという意見が非常に多かったです。自分たちの団体活動を発信できる場の提供、新しい生活様式を取り入れた参考事例、ガイドラインの紹介などがありました。新しい生活様式を取り入れた活動の取り組みでは、3密回避、消毒、換気、マスク着用、健康管理などありました。イベント開催や集まり方について、悩みが多く、課題が出ていました。

オンラインツールの使用状況は、74団体中36団体が使っていて、NPO法人は30団体でした。使用アプリは主にZoom、Skype、LINEなどでした。Zoomの初心者講座があったら参加したいと答えた団体は32団体で、使ったことがないのは22団体でした。この結果から市民

協働センターの Zoom 講座開催につながっていった事例になります。

【話題① 意見交換】

鈴木達也 私の団体の今年度の事業は、森と緑づくりの環境学習に関する事で、屋外で参加人数を減らして実施しました。実施後、A判四ページの報告書を作成してそれを関係各所に配布して事業提言を紹介することで対応しました。



高柳俊男 私は伊那 VALLEY 映画祭を 2019 年から開催していました、2020 年 11 月に 2 回目を開催しました。コロナ禍でオンライン配信はどうかと思いましたが、著作権の問題がありますので今回無理かと思いましたが、映画祭の協賛企業が感染症対策をきちんとやって第 2 回もやりましょうということになり、事前申込制、人数制限、そして現場では感染症対策をとって 3 日間、第 1 回目と同じように開催しました。特に感染を拡大することもなく無事に終了しました。コロナ禍でのイベント開催は、団体によっては人数を半分するなど難しいこともあると思いますが、私たちの場合はすべて協賛企業のおかげで、会場は協賛企業のホールを使用し、入場は無料で収益を考えなくても済みました。これは他の団体も同じようにはいかないと思いますし、この経験が参考になるかどうか分かりませんが、私の経験をお伝えしました。



話題② コロナ禍の伝統芸能の実施と見つめ直し

NPO 法人てほへ 大脇 聡

2 年前の写真を見ると、普通に花祭りが開催できていました。これだけ人がいっぱいいて、声を出しながら舞い狂ってお湯をかけ



たり接触したりして、まさに三密状態の花祭りなんですけど、今年は各会場ではできませんでした。花祭り以外の伝統芸能もほとんどが中止などになったと思っています。今年の東栄町の花祭り開催状況は、10 地区のうち、開催した地区はゼロ、非公開で神事のみやったのは 5 地区、非公開で神事と一部の大事な舞だけやったのは 3 地区、神事も舞も全くなかったのは 2 地区という状況でした。

私たちの住む東園目地区では、非公開で神事のみを地域住民と保存会員で開催しました。神事をやることになったら東園目住民から例年通り寄付をいただき神事を行いました。神事や舞などを継承していくために神事が終わった後に保存会としてではなく、有志として非公開で一部行事を実施しました。

今年、地元での花祭りを経験して結果として発見したことを新たに考え直したことがあります。私は東園目の花祭保存会の会計も担当し、例年と違って村の中だけで実施したので祭りの運営負担がほとんどありませんでした。運営としてはいつもの大変さはありませんでした。結果的に住民が住民のために祭りをを行うという本来のお祭りの形になったという声が住民からも聞かれました。

祭りはそこに暮らす住民が自分たちの地域のために行う、暮らしや生活の一部、祭りとは暮らし生活の一部と思って私はこの東栄町に暮らしながら感じています。ただ過疎化などの社会状況の変化もあり、祭りを取り巻く環境は、かなりいろんな状況的に変化が起きてきたと思っています。村出身者や移住者が祭りに深く関わるのが最近では許され、祭り継承の可能性が大きくなってきました。

それから昔と比べて地域外からの参加が簡単になり、今観光目的のお客さんも増加して、村以外の人に関わる可能性が出てきました。そんな中で運営上の費用などおもてなしをする度合いが村としては増えていきました。今回のシンプルに祭りを一部だけやったこと

を考えた時に、住民の寄付だけで寄付は祭りを維持するために使われることが主な使われ方なんですけども、一般の方から寄付をいただくと祭りの維持にも使いますし、寄付のお返しみたいなものに使う、それからおもてなしをしないと、と村の人は思うので、そこにお金も気も使うことを日常の花祭りの時には感じていました。ただこれは当然来て見ていただくことを考えると仕方ないのかなとは思っています。本来の祭りではなくてイベントの興行みたいな形になってしまっていて、もしかしたらその村の持っている経済的なことやキャパシティ、場所など、いろんなものを超えてしまっていて、村の人が来てくださるお客様のためにどうしたらいいのかというようなことに知らぬ知らぬ間に目が向くようになってしまったということがあるのかなと少し感じました。

それから負の連鎖で、マイナス面ばかり言っていてはいけないんですが、観光の方が増えたのと同時にカメラマンも増えました。舞庭はカメラマンの撮影会場のようになり、村の人たちもカメラの前に立てはいけないと思ってしまう。寄付をいただきながら祭りを維持しているという面もありますが、祭りへの寄付は入場料や食事代ではないと思います。一般の方で祭りを理解してくださっている方もだんだん増えてきましたが、初めてやまだ回数しか来ておらず、伝統芸能をあまり理解されていない方たちにしてみるとお金も払ったのに何もケアしてもらえないとか、こんな不都合があったとかなど不満が出てきてしまうこともあると思います。ただこれは祭りというのは最初にも話したように暮らしの一部なのでそれを見させてもらっている感覚は必要だと思います。

花祭りは誰が誰のために開催するのか、一番の本質を軸にいま一度持続可能な祭りのあり方や仕組みを考えていく必要があると思っています。中心となる人たちを支えていく仕組みを考えていく必要もあるし、それ以外の

形が様々な立場でどうお祭りに関わり、祭りを本当に維持していくっていうことをサポートできるのかと思っています。

一般のお客様には観光客、サポーター、村人がどうお祭りを運営していて、こういう見方で祭りを感じてほしいところをレクチャーして広げていくことを知ってもらいながら祭りに参加してもらう仕組みが大事だと思います。普通に町で行われるイベントとは全く違う要素があると思いますので、祭りは生活の一部でそこに外からのお客様がどう関わっていくかどう関わればいいのかをこの祭りを今後継続していく村の人からしてみるとすごい力になると思うのでそんなことを今回祭りができなかったことで改めてシンプルになったからこそ感じたことです。

【話題② 意見交換】

吉田 弓 和合の念仏踊りは、間際までやるかやらないかっていうことを議論していました。新仏供養ということもありましたので中止にはせず、無観客で開催されました。見張りを立てるなどして一般見物客は固くお断りしました。それから今日ここに来れなかったんですが、坂部の冬まつりを開催されている平松雅隆さんに電話したら、冬祭りを開催できなかったことが悲しくて悲しくてという話をされました。来年は絶対できるように楽しみにしているという話でした。



今中秀裕 神事だけはやったが、舞はやらなかったなどのお話がありましたが、神事と舞の違いがなにかということと、先ほど原点復帰みたいなことを言われていましたが、その本当の神事だけの原点復帰で、これからコロナが終息した後、観光客が来なくても自分たちだけでやっていけるという話になるのか、そのあたりを教えてください。

大脇 聡 花祭りでは、太夫が神社でご祈祷

コロナ禍での取り組みの1つとしては、町内の飲食店のテイクアウトや取り寄せの情報発信を強化しました。チラシに情報を取りまとめて近隣の市町村に対応しました。2つめはオンライン企画の実施支援です。オンラインでイベントができないかという相談が多くありました。何のためにイベントをやっているのか見つめ直す機会にもなりました。3つめは密を避けて実施するイベントで、新しい形を模索する取り組みです。たくさんの人を呼ぶではなく、少人数のお客さんを対象として付加価値の高い企画「ビューティーツーリズム」も行いました。4つめはフリーペーパーでのアウトドアの特集や、自転車を活用したまちめぐりのプロジェクトを立ち上げました。

これからどういうことが必要になってくるかという点では、自然環境だけない東栄町ならではの魅力を作り、付加価値を付けて情報発信して、一過性ではないリピーターにつなげていくことができたらと思います。密を避けた形でのイベントの検討ということでは、既存の店舗を巡ってもらうことでまちにお金が落ちるイベントのやり方を考えて周遊できるように進めていきたいです。もう1つは、こういう状況が激しく変化していく中で、近隣地域からの誘客が重要になってくると思います。

諏訪湖八ヶ岳自転車活用推進協議会

小口良平

私は自転車で世界一周旅を約8年半して、諏訪地域で自転車の活動をし、辰野町に移住しまして上伊那地域で自転車関連のアドバイザーを務めています。辰野町ではサイクルステーションを運営しています。



今年はコロナの影響で自転車業界は追い風傾向になっております。それは2つの理由があって1つとは三密を避けやすい観光であること、もうひとつは三密を避けやすい移動

手段であることです。ヨーロッパでは自転車購入の補助や修理の補助費等を出しておりました。日本では自転車の売れ行きが例年に比べても何倍もの売り上げになっている状況です。自転車移動や観光の需要が生まれました。ただ私たち自転車業界はいろんな変化に対応せざる得ない状況になっております。

去年は私たちはガイド養成を2泊3日で行なう予定でしたが、できませんでした。今年は半分以上がオンライン講義で、実働を1泊2日ぐらいを現地で行うような予定です。サイクリングガイドと行政系の方々のアドバイスというの2つに分けて行う予定です。できるだけ3密を避けながら密になる室内を避けるような形でガイド養成を行っています。

辰野町ではサイクルマップルートを作っていますが、今年度はたくさんの人を誘致する動きがなかなか取りづらかったこともあって、看板を設置しました。一人でも回れるようにサイクルマップ看板を3ルート63か所に設置しました。この時に設置して良かったと思ったのは、改めて危険箇所や設置しなければいけないところの見直しもできましたのでコロナ禍での学びがありました。外国人の方がやがてやってくるような環境をつくっていかねばとこういった対応してます。

三遠南信の話になりますが、上伊那北部でアドバイザー活動をやり、3年ほど前からサイクルスタンドの設置などの環境整備をしております。サイクルマップも2020年度に作りまして、不特定多数の人が走れるようにしました。ツアーは今まで県外の方も呼びしてたのですが、今年は県内重視で、県内の方限定の少人数制で5人4グループに分けながら走るツアーになりました。

今年度の事業からは地域の学生にプロデュースしてもらいサイクルツーリズムを進めようとなりました。その目的の1つは地域のマイクロツーリズムをもう一度見直すために学生の新しい目線で地域の人たちに気づきを得て

もらおうと上伊那北部で事業を進めています。また、8市町村ではDMOと一緒にサイクルマップを使って環境整備を進めています。伊那谷を見ると公共インフラが非常に使いづらい状況があります。やがてやってくるリニアを見据えて飯田方面から人を呼び込み、そして特急あずさから諏訪の方から呼び込んで、この伊那谷の人を呼び込む環境整備をサイクリングマップでしていこうと考えています。実は伊那谷の方には飯田線があり、駅がたくさんあります。距離にして55キロの間に22駅もあります。約2.5キロに1駅の間隔になります。この公共インフラを使いながら自転車と二次交通で観光商品を作ったり、不特定多数の人が少人数でも走れるようなマップ作りと案内できるガイドサイクリングを充実させて、電動アシスト付き折りたたみ式のeバイクを使って女性や子供でも走れるような環境を作ろうと今年度は実証実験をこの地域において行なっております。回を重ねて見えてきたことで、行政の方が観光客目線から観光事業者の目線に変わるという瞬間がありました。

私の意見ですが、いわゆる廃道を作るという考え方になります。これだけ人口減になると減収入となります。町村の収入をどう分配するのか、もう使わない、あまり通らなくなった道はもう整備にお金をかけない、その代わりに使う道を整備して自転車、歩行者、自動車の分担率を上げ、自転車人口を増やすことによって健康寿命は増えます。フレイルという70歳から80歳以上に約1000万円の医療補助費、負担がかかっています。負担が町から浮いてくるとより道にお金をかけられることで、最終的には自転車移動の分担率を上げることが三密を避けるコロナ対策にもつながります。

自転車の観光を大々的というよりは緻密に徐々に進めるべきだと思います。今私はこういう活動をしております。

【話題③ 意見交換】

後藤和彦 山間部の伝統芸能は重要な観光資源だと思います。新野の雪まつりも神事のみでした。大脇さんのお話が基本的なことです。観光資源として祭り暮らしの一部の祭りを同取り入れていくのかは大きな課題となってくると思います。



水上一文 都市部からの観光客に対する地域や店舗の受け入れの体制が整っていないとか、制度の活用が足りなかったのか、そのところにもう一度教えてください。



伊藤拓真 去年は自然を求めた観光客が多く、お金を落としてもらう仕組みができていませんでした。この問題は奥三河地域全体でそうでした。地元の飲食店も域内の方をお客と思っているところがあり、外向けの準備ができなかったと思います。この点については各飲食店がコンセプトを決めて、早めに対応を考えてないといけないと思います。

中野 真 去年、浜松市天竜区熊地区の道の駅の横にある路線バス停車跡で移動販売車6台を使って小さなマルシェを開催しました。



地元には食料品店がないので、魚屋さんにも来てもらいました。そうしたら観光客だけでなく地元のみなさんにもたいへん喜んでくれました。

平川雄一 昨年夏の東栄町の道路や飲食店の混雑状況、観光まちづくり協会の効果はあったのでしょうか。また、サイクルツーリズムと飯田線活用方法についてももう少し具体的に教えてください。

伊藤拓真 新城で渋滞して東栄町まで来れなかったことがありました。営業していた飲食店のなかでも国道沿いの店では混雑したようです。しかし新しい観光客を分散させる案内ができなかったです。そういったことで観光

まちづくり協会ができて4年になりますが、効果が発揮できるのはこれからだと思っています。

小口良平 今レンタル用に折りたたみの電動アシスト自転車eバイクを使っています。コンパクトになって電車に持ち込みやすく、女性や子どもに人気があります。これを利用して、南北に長く地形の起伏が大きい伊那谷のサイクリングコースを半分走って、あとは電車で帰ってもらうというイメージで飯田線を活用する構想は考えています。

小山舜二 昨年夏の奥三河はパンニック状態でした。癒やしを求めてきた観光客はお金を落とすことはありませんでした。それから伝統芸能は、私の住む新城市四谷ではこれまでも寄付なしで実施しています。サイクルツーリズムはこれだけ自転車人口が増えてブームになるとは思っていませんでした。かつては新城市でも自転車の拠点施設がありましたが、ブームになる矢先に廃止され、残念なことでした。



後藤由行 売木村での「うまい！うるぎ米そだて隊」で毎年多くの都市部から申し込みがあります。しかし、昨年は2回しか実施できませんでした。コロナの影響で参加者が減りました。来年度は様子を見ながら少人数で実施する計画です。



■まとめ・閉会あいさつ

NPO 法人地域づくりサポートネット 山内秀彦

今日の意見交換会では、市民活動、文化の伝承、経済的にも厳しい時代になり、密を避け、人が集められない中で集まらなくてもできることも発見できました。他にも新しいものが見えてきたことがありました。伝統芸能も何のためにやるか、こういう時だからこそ見つめ直し、新しいターゲットを狙えることや付加価値をつけるという考えが出てきました。もうすでに新しい形で取り組んでいる方々や取り組みたいという地域があるということが情報交換できてわかってきました。いろいろつながったりしことを三遠南信地域に活かしていくことを期待したいと思います。

2021年度の住民セッションは東三河で開催される予定だと思いますが、コロナとどう向き合いながら新しい人たちを受け入れたり新しいことを始めたりすることができそうです。これがスタートという形になって、また新しいマッチングができればと思います。今回の住民セッションはコロナの影響で、オンラインでリモート（遠隔）の会議の方式でみなさんに集まっていたいで実施した新しい試みでした。また実際に顔を合わせて意見交換できることできる日が来ることを願って、閉会とさせていただきます。ありがとうございました。



住民セッション事前収録にリモート参加者のみなさん